

共同性

communality

福田鈴子 (異文化理解)

FUKUDA, Reiko (Intercultural understanding)

砂子岳彦 (科学基礎論)

SUNAKO, Takehiko (Philosophy of Science)

はじめに

共同性は主にコミュニティ論、政治学、公共性論、哲学などの文脈で語られる。コミュニティという生活の場で築かれ、歴史を経て醸成されてきた共同性は、政治においては社会的な選択の妥当性を構想するためには欠かせない要素である。また、公共性とのかかわりにおいては、共同性は市民社会を維持するための基盤とされる。なお、公共性は個々の絆としての共同性によって支えられ、また共同性は広域の公共性に基づいて成立するという相補的な関係にある。とはいえ共同性と公共性は明確に分解することはできない。一般的共同性は外的な公共性と内省（反省）によって浮かび上がる内属的な自他の関係性の両方を含意している。

このことについてここでは、共同性一般を「相対的共同性」と「内属的共同性」に区分し（第1節）、それぞれについて事例を挙げて説明した上で（第2節、第3節）、内属的共同性が相対的共同性を基礎づけるものとして位置づける（第4節）。

総合人間学と共同性

社会は共同性のもとに成り立っているが、ときとして人は共同性に基づく形式的な規範の実践や手続きに煩わしさを感じることもある。画一化した社会への拒否反応や個性の表現欲求はいつの時代にも見られた。共同性に煩わしさを感じる時、人は思考の中で共同性と自分との差異を感じ、共同性を外に見ている。共同性を共通性と読み替えてみると、共通性には差異からくる同調圧力や葛藤はないことからわかるように、共同性は共通性では捉えきれない。

このように共同性があればよいというのではなく、人間社会は巧みな均衡の上に「和

して同ぜず」(論語)のごときより良き共同性を見出そうとしている。一見して共通性がないところに共同性を実現することは人に与えられた一つの挑戦である。たとえば 19 世紀のオスマン帝国においてムスリムと非ムスリムの平等が保証されて国家レベルの共同性の実現していた。その結果、利益はもとより安寧が享受されていた。近年、パンデミックや異常気象などの問題によって地球規模で共有しなければならない共同性が求められている。日本では阪神・淡路大震災の「ボランティア元年」を機に、災害ボランティア活動が活発になり、東北大震災では国境を超えた支援活動が行われた。社会生活の秩序が災害などで崩れてしまったとき、あらためて人は他者との原初的な共同性に意識的になるが、この共同性は移民社会との共生を試みるヨーロッパ諸国の取り組みや様々な歴史認識のもとで外交が模索する共同性とは質が異なる。共同性は多分野に跨る多様な概念であるが、それを個体間で共有する意味として捉えることができるだろう。

自己と他者は異なる個体として互いに外に前提されている。外に他者を認めたくて構成する共同性をここでは相対的共同性と呼ぶことにする。他方で、現象学は共同性を自己に還元するために、自己と他者に共有する意味を内省的に浮かび上がらせる。共同性を自己に還元する現象学の共同性は相対的共同性とは異なる視点をもっている。2022 年 2 月に勃発したロシア-ウクライナ情勢下で、ウクライナ避難民を援助している在日ロシア人にとって共同性は切実な現実である(毎日新聞 2022)。その共同性とは、自らの内に問う、自らに基づく「意味」であり、他者との交渉を通して構築する相対的な共同性とは異質のものである。現象学的な共同性は自己存在に内属する⁽¹⁾。そこで、自己と他者が映しあうことによって、自らの内に構成される共同性を内属的共同性と呼ぶことにする。

相対的共同性が第三者の視点から相対化されているために相対主義的であるのに対して、内属的共同性は一人称視点から捉えられるために当事者意識(エージェンシー)に基づいている。両者の視座から複眼的に共同性を検討することによって、共同性の意味を個の内外から総合的に捉えることが可能になり、総合人間学の一つの姿勢を提供しているのではないだろうか。次に、相対的共同性と内属的共同性の観点からそれぞれ事例を挙げて検討する。

相対的共同性

地球上には一方的な弾圧によって共同性を築き、推し進めているところもある。共同性が自文化中心主義と結びつくとき、他文化に対してさらなる弾圧を生む。そうした全体主義に対する処方箋として文化相対主義に期待がかけられたとしても不思議ではない。文化相対主義はそれぞれの違いを認め、違いを突き合わせた相互承認を可能にする。協定は相互承認に基づく一つの相対的共同性の表現である。共同性の枠組みを定めることによって共同体の活動が円滑に行われるとしても、その枠組みは常に破られる可能性を孕んでい

る。他方で、円熟した共同体ほど規則が表面的になることは少ない。

異文化間において、個人が異文化適応をする場合に相対的共同性を認知レベルで捉えることが可能である。文化相対主義がもたらす共同性は個人の認知の変容をもたらす。M. ベネット（1986）は「自文化中心主義的認知」から「文化相対主義的認知」によって異文化適応がなされる認知モデルを示した。ベネットのモデルによると、異文化との遭遇によってもたらされる葛藤を乗り越えて、文化相対主義的な観点から自らのアイデンティティを形成していくという弁証法的なプロセスを経る。そのために異文化間コミュニケーションが要請される。違いを共有する運動であるコミュニケーション（数土 1994）によって、相対的共同性が形成される。

相対的共同性はしばしば対立の場面で浮かび上がる。アフリカ系アメリカ人に対する警察の残虐行為をきっかけにアメリカで人種差別抗議運動「ブラック・ライブズ・マター」（BLM）が始まった。井出（2021）は BLM のデモから拡散された SNS を分析して、創発的なつぶやきから構築されていく「公共空間」を分析している。このように BLM が「秩序化・体系化」される過程は、相対的共同性の構築の一例と言えるだろう。しかし、その「秩序化」は BLM の内部にとどまり、他の秩序に対しての共同性を構築するまでには至らず一部が暴徒化した。

文化相対主義は本当に異文化との共生をもたらすのか、その実効性を危ぶむ議論もある（たとえば、北村 2003）。その議論によれば、人には他文化の強い個性に対して許容限度がある可能性、自文化の独自性を特権的に捉えるあまり排他的になる可能性、そして文化相対主義自身が相対化されてしまう論理的な危惧もある。

文化相対主義を否定的に捉えると相対的共同性を見出すことの困難さが前景化するが、ベネットの言う「文化相対主義的認知」に至る過程は、他との交渉による合意形成を一步進めて、異文化適応してアイデンティティの創出に至る可能性を示している。相対的共同性は、制度的に外から共同性を枠付けする場合と、彼我の差異を相対化して自らのアイデンティティを創出する場合という、二つの側面がある。いずれにしろ他者は外に位置づけられている。

内属的共同性

身体が「ある」ことによって自他が分離しているという認知は支えられている。確かに人と人はその〈あいだ〉を介して分離している。しかし、身体に「いる」当事者にとっては自らの身体は見えないし、〈あいだ〉は（距離を隔てた幅として見えない）純粋な奥行であり、自他の実存レベルでの関係が結ばれている。田口（2014）は現象学的視点から、「身体を生きるとは、身体の響き合いを生きるということにほかならない。この響き合いから切り離される仕方で、いわばその欠如態として、私ははじめて、自己の身体を個別的

なものとして経験することができる」と述べている。自己があり他者があり、その後にそれらの関係があると素朴に考えられている。しかし、その自己は他者がいなければ自己を規定できないという意味では、むしろ関係のほうが個別化された自他に先行する。したがって、内属的共同性は相対的共同性に先行している。自他の関係は未だ対象化されていない自己に構成されているという意味で内属的 (intrinsic) である⁽²⁾。自己はその他者との関係性の忘却によって個別性を経験する。

対象化、個別化した自他とその関係が構成されたとしても、その関係はやはり自己に内属する。それゆえ、その関係を他者は別様に考えているかもしれない。それどころか異なって捉えられることでコミュニケーションが必要となっている。他者とのコミュニケーションがとれない状況下にあったとしても、自他の不協和な関係をも受容することで、ときに人はそれを乗り越えることができる。

先に挙げた BLM の例では暴徒化した BLM のデモ集団に向かって、被害者ジョージ・フロイドの弟テレンス・フロイドは、「警察の蛮行があるたびに、同じことが起きている。あなたたちは抗議し、ものを壊し、彼らは動かない。どうして彼らは動かないのか？ 彼らの問題ではないからだ。これはわたしたちの問題だ」(BUSINESS INSIDER 2020) と呼びかけた。「問題」は事実的に常に人の思考のなかにある。その内属的共同性の認知が自己内省によって顕在化したと考えることができる。デモ隊と警官隊の対立問題が「わたしたちの問題」としてテレンス・フロイド氏によっては看破されたように、外的環境がいなくなるものであっても事実的に自分の思考に内属している。

内属的共同性は自己と他者の相対的な関係とは異なる水準を与えているために、相対的な葛藤があっても内属的共同性の次元にそれを打開する余地が残されている。そのことがそのまま見えてきたときに葛藤を手放すことが可能になる。内属的共同性は相対的共同性と異なり、(警官隊との交渉といった) 外部とのコミュニケーションを必ずしも必要とせず、自らの葛藤を解消する契機となりうる。解消の後にあらためて自己と他者が出会い直される。

内属的共同性からの相対的共同性

他者は〈わたし〉の思考、意識の届かない他なるものである。意識する以前から他者は在り、〈わたし〉に眼差しを向けている。他者は〈わたし〉を傷つけるかもしれないし、またあるときは、他者は傷を負って〈わたし〉の目の前に現れるかもしれない。〈わたし〉は否応なしにその状況に巻き込まれる。他者との出会いによって迫られる選択をレヴィナスは応答責任と呼ぶ。助けようが助けまいが、その応答責任の遂行によって自分が何者であるかが意味づけられてしまう。ウクライナ支援をする在日ロシア人や BLM におけるフロイド氏は自身の意味を見出したのではないだろうか。内属的共同性は〈わたし〉の (ふ

だん意識されることのない) 存在レベルの気づきによって与えられる。

互いに他者の存在と関係を認めてはじめて対立できるという意味では対立そのもの、いわんや相対的共同性は存在を認め合う内属的共同性に支えられている。他者との相互承認は弁証法的に構築していく外的かつ能動的であるのに対して、内属的共同性は実存がすでに保持している受動性である。能動的に構築する相対的共同性とそれに先行して受動的に構成されている内属的共同性を弁別することで、階層化された共同性が浮かび上がってくる。このことは、すでにある内属的共同性を無視して相対的共同性を構築するときの危うさを示唆している。たとえば、契約のみに依拠した共同性などがそれにあたる。

相対的共同性が力による人類の共生を図るものであるというのならば、それは他者との相対的な均衡によって導かれた共同性といえる。近年ヨーロッパにおける多文化政策が失敗に終わっているように⁽³⁾、多文化主義や相対主義的な政策には限界がある。人が人として共同性を保つには互いに調和する方法論を知ることにある。共同性のもとに成り立っている社会性が破綻したとき、共同性の意義が問われる。そのとき日常的には気づかないでいた内属的共同性が仲間意識や助け合いとして顕在化する。内属的共同性を確認し回復していくことによって、相対的共同性への道筋が見えてくる。

当初、BLMを掲げるデモに対して強硬な対応を取っていた警察が、ミシガン州、ニュージャージー州、カリフォルニア州、ミズーリ州など多くの地域でジョージ・フロイド氏に対して膝をついて追悼の意をもって黙祷し市民とともに変化を求めるデモ行進に参加した。このように、対立を超えて内属的共同性が相対的共同性へと発展するためには、内属的共同性の顕在化とその表現が原動力になる。すなわち、人の自然な(すでに持っている内属的共同性の)繋がりが知的な相互理解による繋がりを導く。これらの知見は「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳うユネスコ憲章の前文の認識を新たにし、共同性の構築が人に委ねられる。

おわりに

世界では今もなお争い、権力、武力によって一方的な圧力を受けている国々は絶えない。真の共同体を広め理解を得るためには、他者を排除するのではなく、他者と共同性を築くためには何が必要なのか考えることが求められている。他者がいるから自己が見える、他者がいなければ自己が見えない。自己と他者の原的な関係性は応答責任を導く内属的共同性である。人が生きるためには必ず他者の存在が必要不可欠となる。だからといって他者を思慮した自己を形成するのではなく、また自己を思慮した他者を形成するのでもない。自己と他者の共同性を自らに問い、見据えていくことである。それが共に同じ性質をもった人対人の関係になる。

われわれが素朴に理解している共同性は、外に他を見る相対的共同性である。内属的共

同性は相対的共同性に先行する受動的な（既に持っている）共同性である。この内属的共同性はときに非日常的な状況によって露呈してくる。内属的共同性を意識化したうえで改めて相対的共同性に向き合うことで一分断や危機的な状況になる前に一共同性を応用可能なものにすることが期待できる。すくなくとも、内属的共同性の露呈が相対的共同性の表層性に気づく契機となっている。

注

(1) 受動的な共同性とは現象学で言うところの間主観性（フッサール2001）に近似する。この受動性は、能動的にこれから他者と関わろうとするのに先行して、すでに与えられている関係である。受動的な共同性は日常的には潜在化しているが、乳幼児期において主となる認知である。乳幼児にとって自我や所有意識は希薄で共同性という関係が前景化しているため、他の乳幼児の泣きが伝染するいわゆる「もらい泣き」をする。受動的な共同性を内属的共同性ここでは呼んでいる。内属的共同性に基づいて自我が構成されていく。内属的共同性を自己内省によって大人はあらためて認識することができる（福田・砂子2018）。

(2) たとえば、苦手な人がいたとしても、苦手な人がいること自体は問題ではない。問題は苦手意識に対して二次的に苦手な人とうまくやらなければならない、あるいは苦手な人をもっていないという判断との葛藤にある。そうした苦手を感じているという主観的な事実を事実として受容することによって、葛藤から離れる（距離を置く）ことができる（福田・砂子2020）。

(3) ドイツのメルケル首相（BBC News 2010）につづいて英国のキャメロン首相も 2011年に「多文化主義は失敗した」（BBC News 2011）と述べている。

参考文献

- 井出里咲子（2021）「公共性 × 詩のカーゴージ・フロイド事件におけるデモと詩の生成」『日常空間における詩の生成と発展：愛知大学人文社会学研究所 2020 年度オンライン・シンポジウム報告書』：26-38
- 北村光二（2003）「文化相対主義の困難と「文化の共生」の可能性」『文化共生学研究』1（1）：29-34
- 数土直紀（1994）「コミュニケーションによる相互理解の可能性」『ソシオロゴス』18：106-119
- 田口茂（2014）『現象学という思考』、筑摩書房
- 福田鈴子・砂子岳彦（2018）「共生社会へ向けた人間構造の仕組みとその在り方：自己と他者の関係に焦点をあてて」『共生社会システム研究』12：111-131

- 福田鈴子・砂子岳彦 (2020) 「V.E. フランクルの実存を構成する自己と他者：現象学の視点から解く人間構造と共生」『総合人間学研究』 14 : 41-54
- フッサール, エドムント (2001) 『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波書店
- 毎日新聞 (2022) <https://mainichi.jp/articles/20220427/k00/00m/040/031000c>
(2022年4月28日閲覧)
- Bennett, M. J. (1986) "A developmental approach to training for intercultural sensitivity" *International Journal of Intercultural Relations* 10 : 170-198
- BUSINESS INSIDER(2020) <https://www.businessinsider.jp/post-213943> (2022年4月25日閲覧)